

東南アジアの社会の基礎構造について

福 永 安 祥

アジアの社会が、単一であることを希求する声は強いが、むしろ、その多様性が指摘されなければならない。そこには、少なくとも、中国（朝鮮、日本あるいはベトナム）、東南アジア、インド、西アジアの四つの文化圏をみる事ができる。その場合、東南アジアは、半島部と島嶼部の二つの対象的な領域に二億六、〇〇〇万人の大人口が分布して、農業を主たる生産形態とする点において共通性をもつが、しかし、その地理的境域の複雑性、民族構成の多岐性、言語の多様性の点において、他地域に類をみない複雑な社会を構成している。さらに、この地域が、祖先崇拜、精霊信仰と農耕儀礼とを基層に置くところの重層化した宗教文化を展開していることも見逃すことができない。

元来、それぞれの固有な人間の社会——所定の構造原理の貫徹している全体的な社会秩序——には、“それに従うことが、そのメンバーたちに義務として課せられている行為の基準ないし規範”（W J H スプロット）が存在しているのであって、それぞれの社会における宗教、規範、基準あるいは信條の存在形態が、その社会の基本的性格を大きく規定してきていると考えてよいであろう。この場合、その宗教、規範、基準ないし信條が、その当面する生産形態に、直接的な対応関係を有することは必ずしもいえない。異なった生産形態において、同類の宗教、規範、基準ないし信條が存在することは、しばしば確認されているところであるし、また、類似した生産形態において、異質の宗教、規範、基準ないし信條が成立していることも指摘することができる。さらにまた、

一つの政治的秩序のなかに、複数の宗教的秩序が存在し、それらが共存、並存、対立、抗争するところに社会的緊張がいつそう激化していく場合もしばしば指摘されているところである。

かかる観点に立つて、広大な東南アジアの領域をみると、そこには、カトリック文化圏（フィリピン）、大乘仏教圏（ベトナム）、小乗仏教圏（タイ、ラオス、カンボジア、ビルマ）、イスラム文化圏（マレーシア、インドネシア）の四つの宗教文化圏の成立、交錯をみる事が可能であつて、ここにおいても、また、東南アジアの多様性が指摘されなければならない。今日、インドネシアが、一九四五年の独立以来、国家目標として掲げてゐる「*Bineka Tunggal Ika*」（「ビネカ トウンガル イカ」——多様性のなかの統一性）——と云ふことは、東南アジアの多様性を示すものといふことができる。

一、

ベトナムは、西暦紀元前二世紀（BC—一一年より九三九年まで中国の領土）以来の中国との交渉によつて、中国文化の根深い影響が残っており、まず、西暦一世紀に、儒教と道教とが、中国の統治者による教化政策によつて伝えられて、ついで、仏教が、二世紀初頭より⁽¹⁾、陸路中国より、あるいは海路インドより伝来したものとみられている。中国の文献によると、三世紀中期のベトナムには、仏教が、相当程度普及していたようである。ベトナムの仏教は、中国とインドの双方の仏教の影響をうけているが、当初はインド仏教の影響がより強くみられたが、五四四年から六〇二年までの短期間のベトナムの独立のあと、六〇三年から九三九年にいたる中国支配時代に中国の仏教の影響がより決定的となつていく。中国とインドの双方の仏教の影響をうけて、多数の梵語經典がベトナムの地において、漢訳されている。一〇世紀に中国支配を脱して以来、仏教は、ベトナムの民衆の信仰の中心として、「それは外来の宗教であつたが、現在、国民的な宗教となつてゐる」⁽²⁾（*It was a foreign religion. It is a national religion*）と云ふ。

ベトナムにおいては、仏教とともに儒教 (Confucianism) と道教 (Taoism) が信仰されているが、実際においては、混合信仰 (Syncretism) が広汎に成立して、仏教を中心におく三つの宗教から混成された対象が、広く民衆の崇拜の対象となり、ベトナム人の社会にとけこんでいる。したがって、仏教徒の家族が道教の寺院に参拝すること、儒教の礼式に従って祖先の祭礼を行うことなどは、一般にみられるところのものである。

ベトナムの仏教の特質としては⁽³⁾ (1) 禪宗、とくに臨済宗が仏教の中心であったこと、(2) 中国仏教の深い影響をうけているにもかかわらず、禪宗以外の宗派、禪宗の曹洞宗や雲門宗、さらに、天台宗、真言宗、浄土宗などの宗派が殆んどみられないこと、(3) 王権と仏教とが密接な関係をたもち、破仏や法難がなかったこと、これは、仏教に対抗する強力な外来宗教の存在しなかったことにもよるが、同時に一八世紀以降キリスト教に対して多くの迫害がなされてきていて、これが、のちのフランスの介入、植民地化の端緒となっている。さらに、中国的伝統に従う科擧の制度が、一九一一年に廃止されるまで、儒教、道教、仏教の三者を含めて三年に一度の試験が実施されてきた。毎年実施される予備試験の合格者が、三年に一度の試験に応募することを許されるが、この試験に合格すれば、一介の貧書生もいっきよに最高の官職につくことが可能となる。また、二十世紀に入って成立をみた、カオダイ教、ハオハオ教も、混合信仰の傾向をつよくもっている。

ベトナムが、仏教を中心としながら儒教、道教をふくむ重層化した混合信仰を発展させているのに対して、南インドネシアは、さらに複雑な重層化した宗教の展開をみせている。西歴紀元一世紀にインドの移民が、ヒンズー教を西部ジャワに伝えて、二世紀の中期よりジャワの北岸にそって居留地が建設された。この居留地は、やがてインド人の植民地や小王国に発展し、四世紀には、西部ジャワより南部スマトラに及ぶ地域に地歩を確立している。その後、六世紀には、ヒンズー教徒の大群が、西ジャワの障害 (疫病) をさけて、中部ジャワに移住している。

ヒンヅー教にややおくれて仏教が渡来して、八世紀の中部ジャワには、Sailendra 王朝（AD 七五〇年）九〇〇年）が栄えていた。この王朝については、伝えられるところが乏しいが、大乘仏教に深く帰依して、八世紀後半より九世紀の前半の間（七六〇年より八五〇年の間）に Borobudur の大仏殿を建立している。当時、南スマトラには、大乘仏教を奉ずる強大な Sri Vijaya 王朝があった。四世紀から一五世紀にいたるヒンヅー・ジャワ文化は、始原的なインドネシア文化と、ヒンヅー文化との折衷物（Dr. N. J. Krom）とみなされているが、ヒンヅー・ジャワ社会のもつ「二元的性質（dualistic）」は、その後のインドネシアの社会的性格の基礎を規定したものである。ヒンヅー・ジャワ社会は、融和した統一体ではなく、「原始的なインドネシア共同社会の基礎の上に、ヒンヅー諸侯の權威によって村落経済の上に保持された、いわば上部構造をヒンヅー教が形造った」（G. G. Griep）のである。

一五世紀中期に、イスラム教が、インドネシアの地に渡来した。イスラム教は、すでに、一三世紀末、一二九〇年代に、アラビアやインドの商人によってスマトラに伝えられ、マライ半島のマラッカを経て、ジャワに伝えられた。今日、スマトラの中部以北においては、イスラムの影響がとくにつよく、Hassan, Ali, などの Arab 的な名前が多くみられるし、ジャワでは、サンスクリット系統の名前（名の末尾に O がつく）が一般的であるという。

かくて、今日のインドネシアは、基層に原始信仰の跡を多分に残しながら、イスラムの信仰が普及し、ヒンドウ・教はジャワの東方のバリ半島のみに残存し、しかも、ジャワ各地に仏教が残存するという典型的な混合信仰の様相を展開している。

東南アジアの社会を考察する場合、まず、重層化した宗教文化の実態に眼をそそぐことが何よりも必要であって、閉鎖的な村落社会をむすびつけるものは、宗教であり、近代軍隊と官僚組織が十分に成立していなかった東南アジアにおいては、宗教は国民的統合という実に大きな社会的役割を荷ってきているのである。ベトナムにお

いては、一九五五年の「全国仏教徒協会」の設立まで、仏教徒は、全国的な統一組織をもたなかった。多数の寺院や仏塔（バゴダ）は、それぞれ自立して、村や部落などの自治体や個人の力によって維持されてきたのにすぎない。今日、東南アジアの宗教者が、いずれも、民族主義的傾向を強く示していることも故なしとしない。

二、

東南アジアの四つの宗教文化圏に共通な基礎構造を比較社会的に考察してみると、まず第一に、この地域は、インド文化のつよい影響のもとにインド化した国家（Indianized state）がすでに西暦一世紀に出現しているにも拘らず、Casteの成立、展開がみられなかったことが、指摘される。

バラモン教、ヒンドゥー教、仏教をそれぞれ中心とするインド化が、王冢と貴族と少数の官僚の間には進行したが、それは、大衆と遊離したものであって、民衆は、祖先崇拜、精霊崇拜、農耕儀礼に沈潜して、社会制度としてのCasteは、ついにそだつことがなかった。むしろ、多様な民族の存在、民族間の対立、反目が、ethnic caste（人種間階層制）をつくる場合を指摘することが出来るし、さらに、J. S. Furnivall の *Plural Society* や、一種 *ethnic caste* と考えることも出来る。

とくに、ヒンドゥー教の浸透の強いスマトラ、ジャワにおいて、インドのCaste制が如何なる影響を及したか、さらにイスラムの受容とともにそれらが如何に消滅ないしその痕跡を残しているか、解明すべき多くの問題が残されている。一九六六年にバリ島の調査をされた森弘之氏⁽⁴⁾によると、バリ人口の約九五%がヒンドゥー教に属するものとされている。

C. Lekekerker は、一九二六年の論文の中で、バリ島の人口の九五%（一九二六年当時、九一七、〇〇〇人）をしめるヒンドゥー教徒（Hindu Bali）のCaste別の人口を挙げている。かれによると、バリにはCasteが存在しているが、バリ社会の小部分が三階級に組織されているのみであるという。

バリ島の人口

宗教	人口	比率
ヒンドゥー	二、五〇〇、〇〇〇	九五・一六%
イスラム	一一〇、〇〇〇	四・一九%
クリステン	一〇、〇〇〇	〇・六五%
カトリック	七、〇〇〇	
合計	二、六二七、〇〇〇	一〇〇・〇〇%

(クリステンとは、プロテスタントの意)

Caste	人口	比率
Brahman	九、八五〇人	一・〇七%
Ksjaatria	二五、二六〇人	二・七五%
Weisja	二三、四五〇人	二・五六%
計	五八、五六〇人	六・三八%

これによるCasteの上層の三階級 (Triwangsa トリワンサという) の者が全体の僅か六・三八

%をしめるのみで、残りの九三・六二%の階層性が問題となる。これらは、すべて Soedra であるという解釈が多くなされているが、むしろ Caste に属さないもの、ヒンドゥーが渡来する以前の土着のグループとみる解釈が当をえたものと考えられる。

第二に、中国の宗族制にみられる如き家父長制に立つ大家族制度の存在がみられないこと。東南アジアの村落社会においては、ベトナムを除き、一般に婦人の地位が高く、農耕における婦人の役割を反映して、男女の権威主義的差別がすくない。尤もベトナムの社会のみは、堅固な家族制度に基礎をおくもので、家族員の間に強固な団結がつけられて、祖先崇拜は、子孫のものにとっての大きな義務となっている。これは家の永続性に最高の価値をおく、儒教的な社会道徳に基づくところが大きい。

これに対して、北部タイのチャンマイ Chiang-Mai 盆地の一米作農村のムーバン・サンカブトン Mub-ang Sankapong の調査によると⁽⁵⁾、人々の生活は、(1)核家族（一家族の平均家族員数は四・九人）を基本的な単位として営まれて、(2)結婚した子は、親と別居して独立の家族をもち、配偶者の選択はまったく当事者にまかされていること、(3)居住規制は妻方住婚が支配的であるが、場合によってさまざまな例外が生じる。ほとんどの場合、夫が妻の家に移り住み、妻の親と同居するか、かたわらに新居を設けて、かまどを別にする。(4)家族の中では、成人男女間での分業はあまり目立たず、誰でも働ける能力のあるものは働くのが原則である。したがって、(5)夫と妻との関係は対等に近く、夫が妻を命令的に服従させることはない。しかも、妻あるいは女の家族内の地位は古くから低くなくて、これは外来思想の影響によるものではないこと、などの諸点が報告されている。また、インドネシア、とくにスマトラ西海岸の Padang 市周辺の Minan Kabau 族の人たちの間には、今日でもなお、財産相続の上では、母系制がつよく残っている。

第三に、西アジアの遊牧民社会が村落共同体の構成を欠落していて、漸く近年に定着農村の形成がはじめられたのに比して、東南アジアは、古く、村落社会が形成されて、少数の山岳民族の場合を除き、村落社会が社会生

活の重要な単位となっていることが指摘できる。また、アフリカにみられる部族共同体も東南アジアの社会にみることが出来ない。

第四に、東南アジアにおいては、西欧諸国および日本において成立をみたような強固な中央集権的封建制度が成立したことがない。小地域にわたる領主制、ないしそれらを統合した古代国家の存在は指摘することができるが、かつて封建制の成立した時期があったことを明らかにすることは出来ないし、また現に封建制が存立しているということも出来ない。むしろ、自己自足的、閉鎖的な村落社会が各地に散在して、それらをたばねるゆるやかな領主制ないし小王国が存在するのみで、国民的統一が広汎に存立していなかった点に、この地域が一五世紀以降に急速に西欧諸国の植民地へと変貌していった原因の一つをみることでしよう。

三、

東南アジアの社会の基礎構造について、これまで、人々の価値観の基礎となる宗教の問題、民衆の生活の場である村落社会の重要性とを指摘してきたが、ここで、東南アジアの半島部、インドシナの村落社会に関する仮説を検討しておきたいと思う。

まず第一に、タイの農村、村落社会を考察する場合、有名なエンブリー（J. F. Embree）の“ゆるやかな結合関係をもった社会組織”論（J. F. Embree, *Thailand—a loosely structured social system*, “*American Anthropologist*” Vol. 52, No. 2, 1950）が有名。

エンブリーは、さきに一九三五年八月から一九三六年十二月までの一年半、熊本県須恵村の実態調査を夫人と共に実施して、著書“*Suye Mura—A Japanese Village*”（The University of Chicago Press, 1939）を発表している。この調査研究は“A. R. Radcliffe Brown 教授の指導の下に、シカゴ大学社会科学部が試みた東アジア社会研究の一環をなすもので、日本の農村社会の総合

的研究をめざしたものである。須恵村は、養蚕を副業とした水田耕作村で、エンブリーは農村社会の特色を、協同関係、労力の交換、宗教的行事の三者においている。“Suye Mura”は、アメリカの人類学の伝統に従って、村の歴史的背景、村の社会組織、家族と家庭生活、協同の諸形態、社会階級、特定個人の生活史、宗教、社会生活の変容の八章を中心にして記述されている。かつて、人類学は、文字をもたない未開の社会を研究対象とするものと考えられてきたが、近年 R. Redfield, W. L. Warner などの努力によって、文明社会の分析が試みられるようになってきており、この研究は、アメリカ人類学界の研究協同をひきついで、東アジアの文明社会の実態調査をめざす最初の試みとして計画されたものである。

第二世界大戦後、タイ国と米国との政治関係がより密接になるとともに、アメリカ人学者によるタイ社会の調査研究がはじめられたが、エンブリーのタイ農村研究は、その先駆的業績の一つをなすものである。エンブリーによると、日本の豊村は、須恵村においてみられるような閉鎖性(closeness, closed society)をもち村落共同体の拘束力がつよく、個人の行動の自由は少ないが、タイの村落社会は、村落共同体のゆるやかな構造(looseness, loosely structured social system)のために、個人の行動に対する社会的規制が厳しくなく、個人が放任されていること、社会的責任の概念が乏しいことなどが指摘されている。タイ人の社会的行動が、個人主義的傾向をもち易く、日本人の社会的行動に比して、規則性、規律、清潔さを欠く場合が多く、時間の観念がないことなどが問題とされているが、これが、村落社会の“ゆるやかな結合関係”に由来するものかどうかは、俄に断定することは出来ないが、日本の農村社会をclosenessとして、これと比較してみると、タイの村落社会がloosenessであるという比較社会学的規定は、やや印象的な規定であって、今後解明すべき幾多の問題点をもつが、一つの仮説としての意味をもつものと思う。

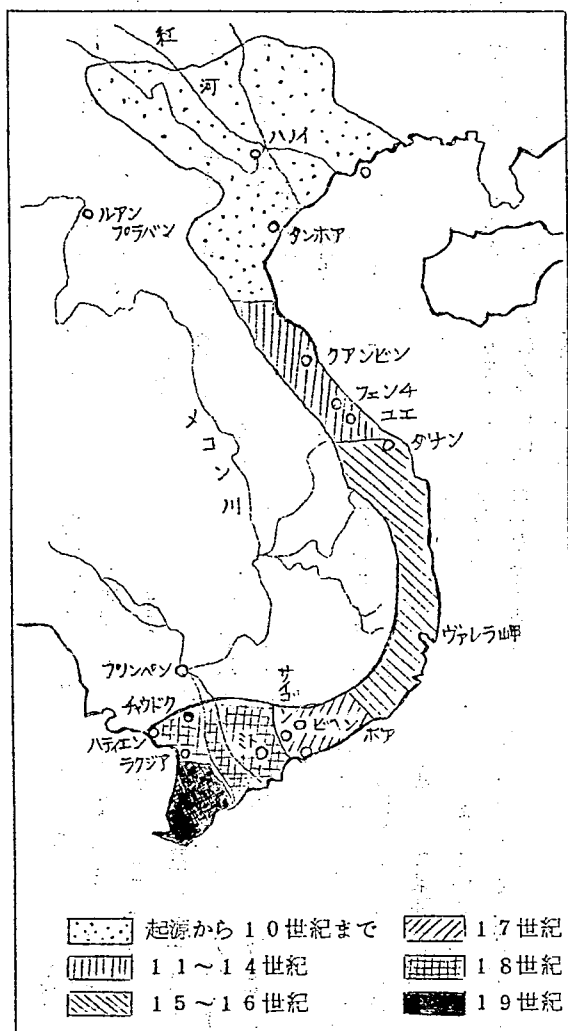
タイの村落社会に関するエンブリーの仮説に対して、タイ農村と対照的な社会構造をもつベトナムの農村についての見解を検討しておきたいと思う。東南アジアの各地域はかつて西欧諸国の植民地であったために、農村研

究についても、植民本国の研究者による業績が、本国の植民地行政上の必要と関連しながら数多く残されていて、オランダ人によるインドネシア研究、フランス人のインドシナ研究などをみることができる。ベトナムの農村については、古く、オリイの「トンキン安南人共同体」(La Commune Annamite au Tonkin, 1894)があり、仏領インドシナ時代の代表的業績としては、グルーの「トンキンデルタの農民」(Pierre Gourou, Les Paysans du Delta Tonkinois, 1936)がある。第二次世界大戦後においては、フランス人のはや失われた旧植民地に対する関心は稀薄になっていくようで、ベトナム人による新たな研究や、この地域に深い政治的関係をもつにいたった米国人の研究が増加しつつある。

パンン(André Masson, Histoire du Vietnam. 白水社)は、フランス人の伝統的な植民地史観の枠を出るものではないが、ベトナム文明の本質的性格に関する一つの見解としてここにふれておきたい。かれによると、ベトナム文明は、ヨーロッパの個人主義的文明とまったく異なった集団的性格のものであること、すべてのベトナム人はきびしい規制によって家族という枠のなかに組みこまれているが、その家族もまた村の不可分な一部分をなしているのである。村は、たんなる家族集団ではなく、「すべての成員が連帯感によって結ばれている単一の精神的人格」を有している。

家族の者は、家長が認めないものをうけいれることができないように、村は、他所者をなかなかうけいれず、後述するように、「長老らを中心とするきわめて閉鎖的な社会」をつくっており、「村の守護神の崇拜という同一の宗教的紐帯」によって村の人々は、むすばれている。村の人々の間の連帯性は、各種の事業組織、とくに葬儀組合の組織に顕著に示されるという。そこで、メコン・デルタの調査事例によりながら、ベトナムの農村の構造をさぐってみたいと思う。

四、



「メコン・デルタは、中国とインドの偉大な伝統が相会する唯一の場所」(G. Hickey) (6) であるといふ。インド文化は、アンナン山系の西に長くともまっていたし、中国の伝統がメコン・デルタに及んだのは主として一八世紀以降のことである。ベトナム人の「Nam-Tien」(南下運動)は、一五世紀にチャム人のチャンバ王国(Champa, 占城、二一五世紀中部ベトナムを領域とする)を破滅させることによって、はじめて可能となった。サイゴンの周辺にベトナム人が南下してきたのは、一七世紀であり、メコン・デルタ南部にまでベトナム人の手がとどいたのは一九世紀以降のことである。一八世紀に明朝の遺臣たちがのがれておちついたのが、今日の My-Tho の町である。

ベトナムの村は、村(Thôn)・社(Xã)・府(Lang)とよばれて、有力者(郷職 Notables)によって治められるきわめて閉鎖的な自治体である。村は、税の割当に対し意見を具申し、租税の徴収を行ない、自己の財源をもって、公共事業を行ない、土地

の警察事務を行なう。有力者（郷職）は、地主、商人、富裕な金利生活者、有能にして徳望ある住民などを中心とし、その職務権限は、住民の数、町村事務の重要度、居住者の身分、その他の慣習によって異なっている。

ベトナムの農村は、北・中部は集村、南部のメコン・デルタは、散村の形態が多く、地域によって村の社会構造には差違があるが、（一）村の自治組織と、（二）親族組織（中国人とベトナム人の親族組織は非常に大きな類似性をもつ）については、共通性が高い。

一九〇四年より一九四五年八月まで、有力者会（*Conseil de notables*）は、一人のメンバーによって構成されている。一人のメンバーは、年令順にえらばれる一種の年令階級をなすもので、一人のうちに上位の者が村の最高責任者、村の財産の管理、予算の編成、収支の監督などの任にあたり、下位の者が村の行政の執行機関、秩序の維持、租税の徴収、決議の実行を行なう。村長（社長）は、有力者の最低位者で、決議の執行と村と省庁の連絡にあたる。村長は、有力者により選出され、省当局の認可を必要とする。メコン・デルタのカンハウ村の自治組織はつぎのとおりである。(7)

I 一九四五年八月まで

1. Village chief
2. Deputy chief
3. Advisor on laws and regulations
4. Adviser on village budget
5. Arbitrator of Minor conflicts among villagers
6. Secretary to Council
7. Police chief
8. Advisor on village rolls and accounts

9. Intermediary between judicial authorities and village council.
10. Intermediary between village and administration

11. Executive notable

12. Civil Status officer

II Viet Minh

1. Chief

2. Police chief

3. Finance officer

4. Public works officer

5. Civil status officer

III 一九五八年以降

1. Chief

2. Deputy chief

3. Finance officer

4. Police chief

5. Civil status officer

太平洋戦争終結後のベトナム時代に五人委員会となり、一九五八年 Neo Dinh Diem 政権下においても五人制委員会がとられて、今日にいたっている。

村の村民結合の中心は、Dinh（亭）である。これは、村の共同集会所と鎮守を兼ねた性格のもので、なかば、宗教的、なかば民事的性格の建物、村を守護する精霊を祭る場所、村の長老、有力者たちが集まって地元の利害

にかかわる問題を論じたり、祭の日に宴会をやったりする場所であって、一つの村には必ず一つの Dinh (亭) がある。Dinh (デイン) は、寺院である廟 (チュア) や仏塔 (Pagoda) とは、目的の点からも、構造の点からも異なっている。

以上は、昭和四十六年一月二十八日(木)の明星大学人文学部社会科学の研究発表大会における発表要旨である。年度末と大学院開設準備と、再度のベトナム地域の調査旅行のための準備とで、十分な整理ができなかったが、他日を期したいと思う。

- (1) Mai-Tho-Truyen, *Le Bouddhisme Au Vietnam, Saigon, 1962*
- (2) 小川 宏 ヴェトナム仏教史略説 (山本達郎編 東南アジアの宗教と政治)
- (3) 森 弘之 バリの土着的宗教とヒンドゥー教 (右に同じ)
- (4) 友杉 孝 ムーバン・サンカプトング、北部タイの米作農村 (大野実雄編著 アジアの農村)
- (5) Gerald Hickey, *Village in Vietnam, Yale Univ. Press, 1964.*
- (6)
- (7)